孤独な愛され女王蜂　8

孤独な愛され女王蜂　8

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19492448

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番はヨシ霊です。♡喘ぎあり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　8

というわけで。
俺とヨシフはめでたく恋人同士になったので、早速やろうかとベッドに誘ったら、ヨシフがベッドの上にキチンと正座したので、俺もつられて正座する。
「お前と付き合う前に、言っておきたいことがある」
え、何？関白宣言？
「浮気はするな。いやしないで欲しい。できたらするな。いや
ちょっとは大目に見るかな……まあ覚悟はしておく」
そ、そうなんだ。
「これまでビッチで通してきたんだ。ヒートの時に俺が側にいられないこともあるだろ。でも非合意の時は言え。捕まえに行くから」
「うん、分かった。じゃあヤロ……」
「まあ待て」
まだあるのか……
「セフレ全部切れ。……いやセフレまでは目をつぶろう。でも彼氏はダメだ。別れてくれ」
「まあいいけど……」
「あと俺は返品不可だ。付き合った以上別れられると思うな」
「なんか別の曲も混ざってきたな……いやごめん、分かった分かった。でもヨシフが俺と別れたいって言うならいつでも別れるから、安心してくれよ？」
あからさまにヨシフの顔が不機嫌になる。
「お前俺が告白した重大さ分かってないだろ」
「うんまあたぶん」
「いいか、俺は善人も悪人も山ほど見てきてる。その内面も暴いてきた。そんな俺が選んだ男だぞ。俺から別れる訳ないだろ」
「……っ」
照れる。ヤバい、顔真っ赤だ。ヒートで誤魔化したい……っ。
「あと、少なくとも俺とやる時はヒート誘発剤使うな。ヒート周期めちゃくちゃになるぞ。ヒートを味合わせてくれるサービス精神は

高く買うが、俺は気持ちだけで結構だ」
「いや、ちょっと待て、ヒート起こして無かったら俺ただのオッサンなんだけど！？」
「まだそんな歳じゃないだろ」
「いやだけど……っ、ヒートじゃなかったら抱けないって……！」
はぁ、とため息をついてヨシフは俺の手をぐいっと掴んで、股間に誘導する。
がっっっちがちだった。
「えっなんで！？」
「お前今抑制剤飲んでるから、フェロモンほとんど無いからな。だからこれはフェロモンのせいじゃない」
「てことは……」
俺の推理が冴え渡る。
「変態……？」
「侮辱罪でしょっぴくぞこの馬鹿。……おまえだから勃つってこった」
「俺、だから？」
ああ。
これ以上俺を甘やかさないで欲しい。
「オメガに勃ってるんじゃない。霊幻新隆に興奮してるんだ」
「……っ」
「だからヒート誘発剤はいらない」
だめだ。
俺、しゃべれなくなりそう。
「こんなものかな。じゃあ、抱かせて欲しいんだが、いいか？」
「いちいち聞くなよ……っ」
「同意は大事だ」
「……いいよっ……」
あー、俺、処女かよ。
なっさけねぇ、顔真っ赤だわ……。
「抱いて……っ、あ！」
ぐいっと腕を引かれて、荒々しく口付けられる。
「待って、服、服脱ぐから」

「俺が脱がせる」
「電気消して……っ！」
ヨシフがベッドサイドの灰皿に置いたタバコをちょっと吸って吐き出す。
煙にスイッチが押されてフッと電気が消えて、枕元の間接照明だけがぼんやり光っている。
「もういいな？」
そう言ってヨシフはちょっと乱暴に俺の服を剥いでいく。理性的なヨシフの、野生的な面を見てギャップでキュンキュンしてしまう。

嗚呼。
骨まで食べられたい。

上半身はあっという間に裸にされてしまった。
「ちょっと運動不足じゃねぇか？」
腹を揉まれながら言われてムッとする。
「夜の運動は足りてるはずなんだけどな……っ、んむっ」
ぐいとアゴを掴まれてまた激しく口付けられる。『黙れ』の代わりだろうか。ヤキモチ妬くとキスしちゃうのか、可愛いな……♡
「下、脱がせるぞ」
「ぁ、っ」
手早くベルトを外され、ズボンと下着を同時に下ろされる。
すっかり勃ち上がった自身が曝け出されて、思わず顔を逸らす。
「お前もすっかり興奮してるじゃねぇか」
「……アルファフェロモンのせいだから」
「ん？おかしいな。フェアじゃねぇと思って、俺もさっき抑制剤を飲んだから、アルファフェロモンは出てないはずなんだがな」
「！！」
は、
恥ずかしい……！！
俺はただ、ヨシフの匂いに、手付きに興奮しただけかよ……！！
「あ、う」
「お得意のおしゃべりはどうしたよ、センセ」

服を脱ぎながら揶揄うように笑って、ヨシフは唇に指で触れてくる。
「ん……♡」
俺はヨシフに向き直り、指を唇で咥えながら、流し目でヨシフを煽る。
「あ、ソレやめろ。喘ぎ声も表情も演技するんじゃねぇ。萎える。声が出るなら出しゃいいが、出ないなら出ないでいい」
注文が多いな！？
俺はめんどくさくなってヨシフの指を好きにさせる。
俺の唇を散々いじり倒したヨシフは、指で口の中を探り始めた。
「は、……っ」
ぞりぞりと舌を撫でられて変な痺れが背筋を走った。
「ぁぐ……」
指が歯をひとつずつつまんで、揺らして、撫でて、形を覚えるように何度も擦る。
口の中はもうぐちゃぐちゃだ。唾液腺の出口を捏ねられてダラダラとツバが出て止まらない。
ベロの下の柔らかい肉をこね回して、やっとヨシフの指は口から出て行った。
と、思ったら、唇が瞼に落ちて来る。
右の瞼に、左の瞼に、何度も、柔らかく、まつ毛を食むように、ちゅ、ちゅ、と。
「……目玉舐めていいか？前から綺麗だなと思ってたんだ」
「駄目に決まってんだろ！！雑菌入るわ！！」
「そうか」
残念そうに呟いた唇が、頬を滑り落ちて耳に向かう。
「ひ、ぃ……っ」
ベロリと舐められて、舌の先で耳タブの凸凹を探られる。
「あ、あ、あぅ、」
そのまま耳の穴まで舌を差し込まれて、脳まで響く水音に腰が跳ねた。
右耳が終わったら、左耳も。
「あぁ……っ」

甘く掠れた声が出て、カウパーがたらりとこぼれた。
もう挿れて欲しい。もうイきたい。
「ヨシフ、も、繋がりたい……っ」
「もう少し触りたいんだが……ダメか？」
くっ、そんなシベリアンハスキーみたいな可愛い顔でおねだりしやがって……！！
「も、少し、だけだからな……っ」
お許しが出たヨシフは楽しそうに俺の手を取る。
握って、擦って、恋人繋ぎする。
一旦手を外したヨシフは、指を一本ずつ口に含み始めた。
ぐちゅ……ちゅぱ、と響く音に腰がむずむずしてくる。
「ぅ、……ぅ、」
変な感じだ。尾てい骨がツーンとしてきて、もじもじと動いてしまう。その度にこぷりこぷりとカウパーが鈴口からあふれた。
右手がおわったら、左手。
「ン……ぅ、あっ」
──しゃぶり尽くされていく。
俺を余すところなく味わっていこうとするヨシフに、くらくらする。
「ぁ、っ」
二の腕にキスマークを残された。
「これっ……困るっ……」
「見せなきゃいい」
このヤキモチ焼きめ。腕まくりしたら見えちゃうだろうが。
そのままヨシフの唇が鎖骨を滑り始めて、薄い小豆色の頭で視界がいっぱいになる。
ちゅ、ちゅと胸に唇が移動し始めて、
「えっちょっと待っ」
あ───っ♡
「乳首はやめろ！！」
「てことは、イイんだな？」
ざりざりと舌の粒々でこねられ続けて、左の乳首がツンと勃ってくる。

形を成した乳首を舌で上下に押しつぶすようにいじられて、たまらない声が出た。
「あぁっ……もう、挿れてくれよぉ……っ」
やっと左の乳首から離れた口が、次は当然の様に右の乳首に移動する。
「ちょっと！もう、ねちっこいぞ……っ」
「ふぉうか？」
また丹念に乳首を舐めながら返してくる。
「っあ♡」
じわじわと身体が追い詰められてきた。
──焦らされている。
ほほう……っ、ドビッチのこの俺にセックスで勝負を仕掛けようとは、見上げた度胸だ……っ！
「その勝負受けて立つ！！」
「何の話だ」
ヨシフは訝しげに目を細めながら、すり、と手の甲で脇腹を撫ぜてきた。
「ひっ！」
あ、さっそく負けそう。さすがスパイ、あっちの方も百戦錬磨なのだろうか。
「……余計な事を考えている顔をしてるから、言っておくが俺はハニトラ系は苦手だ。これはただの趣味だ」
うーん、エッチな身体検査をされている気分だ。ヨシフはカウパーでダラダラの俺の陰茎はスルーして、すすす、と内腿を撫ぜてきた。
「ん、っ……」
あ、負けそ。
ぱく、とヨシフが足の指を口に入れた。
「あぁああっ♡」
指の間を舌でしごかれて、変な声が出た。ぴりぴりと頭まで痺れて、シーツをぎゅっと掴んでしまう。
「ん？これ好きか？」
「やだって、やめろよ……！」

意地悪そうにヨシフの三白眼が細められる。
「あぁああっ、あっ♡」
次は右足が犠牲になった。
「はーっ♡はあっ♡」
「じゃあ、そろそろ挿れるな」
早くしろ、馬鹿っ
「っん♡」
クチュ、と濡れてるアナルにヨシフのゴツゴツした指が潜り込んでくる。
「ん♡ん♡ん……っ♡」
内部を繊細な指に探られて、ぞくぞくが止まらない。
俺こんな手マン好きだったっけ……？♡
あ。
違う。
あの指だから。
俺の身体を満遍なく触っていった指だから。
身体が悦んでるんだ。
「あっ♡あ、う、イ、っくからぁ……っ！」
「いっていいぞ。見せろ」
ぐり、とヨシフの指がたまたま前立腺をえぐった。
「ぁ……っ♡」
ビクン、と身体が跳ねて。
ガクガクと足が震える。
じんわりとした快感が暴力的なほどに神経を殴りつけて犯していく。
俺はその波をシーツを握りしめて耐えた。
「イ……ったぁ……♡」
はく、と空気を食んで、目に涙が浮かんだ。
「これは……なかなかいいな」
大真面目な顔をしてコワモテが何か言ってる。
「もう少し、いかせたいんだが」
「〰〰〰〰っ、いい加減にしろよ、前戯しつっこいんだよ！！」
メスイキまでさせやがって！！

「それは……悪かった」
身体を起こしたヨシフが、指をアナルから抜いてゴムを取りながら
ニヤリと悪そうに笑う。
「そんなに俺の（・・）が欲しかったのか。悪い事をした」
「〰〰〰〰っ、この……っ！」
言い方！！
「霊幻」
更に何か言ってやろうと開いた口が、ヨシフの真面目な顔で閉じら
れる。
「挿れるぞ」
ごくっと喉が鳴った。ヒートを起こしてないのに男根を受け入れる
のは初めてだ。
……痛くないのだろうか。
「辛かったら言え」
俺はこくこくと頷く。
ずぬ、と押し込まれて。
「ア……ッ」
その圧迫感に俺は思わずのけ反る。
苦しい……ッ
「ダメ……っ、抜いて……っ！」
「大丈夫か、もう少し慣らすか？」
ふるふると首を振る。指では充分だった。
「……男同士だとバックからの方が楽だと聞いたことがある。試し
てみるか？」
俺はこくんと頷いた。
ゴソゴソと体位を変える。
「大丈夫だから……挿れてくれ」
「分かった」
今度はズブズブとスムーズに入っていく。
良かった、とホッとした。
ヨシフと一つになれたのが嬉しい。
俺にはその満足感だけで充分だ。
──こつ、とヨシフの逸物が奥に当たるまでは、そう思っていた。

「ん、っ！？♡」
じわ、と身体に火が灯る。
「……っ、動くぞ」
「あ、まっ、まって、」
ずるるる、と逸物が抜ける感覚に。
生理的に輸精管が刺激されて、ポタポタと精液が出た。
「あ……っ」
「抜くの気持ちいいか、所長？」
耳元でっ、言うなぁっ♡
俺は身体を貫かれる衝撃に、もう必死に頷くしかできない。
「あぁ……っ！」
また、ずん、と奥まで侵入されて、頭を逸らす。
俺の中を荒らす異物が、気持ちいいスイッチを軒並み押して回るのだ。
たまらない。
「あ、あ、あっ♡」
徐々にヨシフの動きが速くなる。
ヨシフも限界が近いのだろう。
「そこっ♡気持ちいいっ♡もっと擦って……っ♡」
ゴリゴリと抉られる前立腺から失神しそうな気持ちよさが脳髄まで上がってくる。
「分かった」
淡々と返すヨシフの、しかし息は荒い。
ぽた、と落ちて来る汗が心地よい。
「イく、ヨシフっ、イく……っ♡」
ヨシフが手を重ねて体重をかけて来る。
「──イけ」
「あぁああっ♡♡♡」
目の前がスパークして、視界が上から暗くなる。気持ち良すぎて失神しかけた。
「……っく」
ヨシフも俺の奥で動きを止めた。
じわ、と熱さをゴムごしに感じる。

「はぁ、はぁ……」
ヨシフは息を整えながら、ペロリと俺のうなじを舐めた。
「ひ、っ！？」
「あ、悪い。思わず……噛みたくなった」
きゅう、と心臓が痛くなる。
「噛んでくれ」
「は？でも……」
くっきり残るモブの噛み跡。それでも。
「今だけでも、ヨシフの番になりたい。俺をヨシフのモノにして……っ」
「……っ、俺も、お前のものだ」
がっ、とヨシフがうなじを強く噛んでくれた。
こんな儀式には意味がない。
ただのセックスのスパイスだ。
──そのはずだった。
「「う、っ！？」」
ドクン、と心臓が跳ねて、全身が多幸感に満たされる。
「あ、あ、あ、あ、」
細胞の一つ一つが、ヨシフのモノになっていく感覚。
「よし、よしふっ」
これは、番化の──！！
「わるいっ、ラット、ラットが……っ！！」
「あああぁっ！」
性急に性器を打ち込まれて、身体がびっくりする。
「───っ♡♡♡♡」
おかしいっ♡抑制剤飲んでるのにっ♡
ひ、ヒート、ひーとがぁ……っ♡
「はぁっ、はぁ、はぁ、」
腰を打ち付ける音。どちらのものか分からない荒い吐息。
何が起こってるのぉ……っ♡♡♡

※

【同時刻、？？？】

「おぇっ、げほっ！！」
「大丈夫かい、影山くん」
突然トイレに駆け込んだ茂夫に芹沢は心配そうに声をかける。
「……番が解消された」
「えっ」
「……嫌な予感がする」
その涼やかな目元は、ここにはいない新入りの面影を睨みつけた。

続